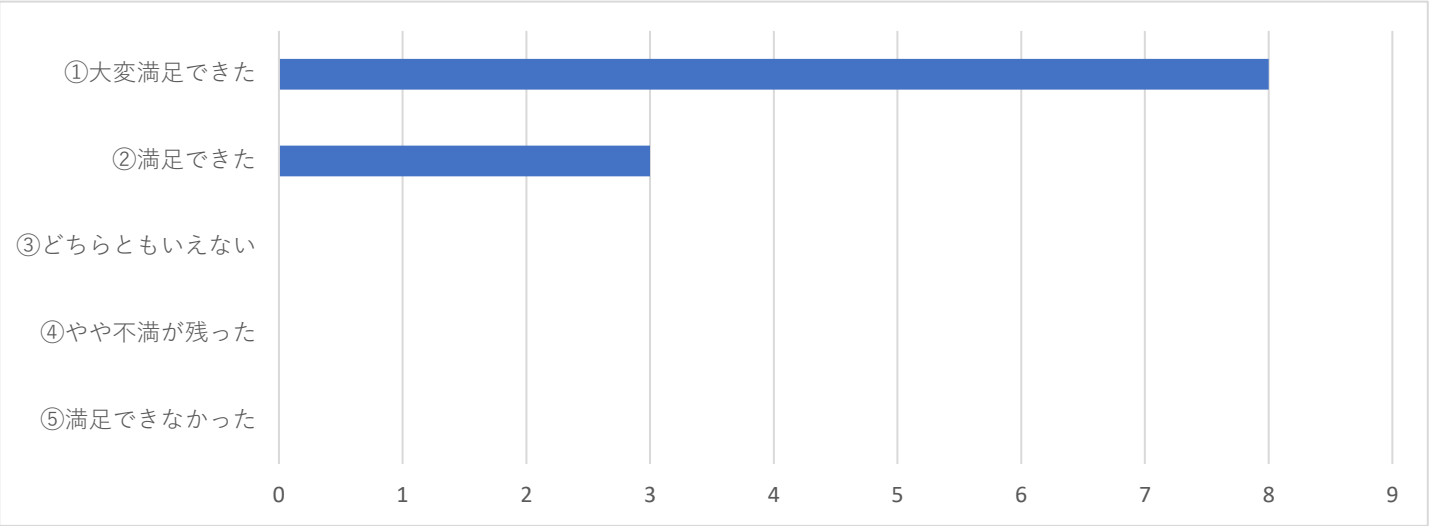


令和6年度 能登半島地震復興支援セミナー 第2回 アンケート

【日時】 令和 6 年 6 月 1 0 日(月) 1 3 時 0 0 分～1 4 時 0 0 分
【開催】 オンライン
【タイトル】 被災地の現状と被災者支援のこれから
【講師】 田中 純一 北陸学院大学 社会学部 社会学科 教授
【座長】 佐川 純一 金沢大学 人間社会研究域地域創造学系・教授

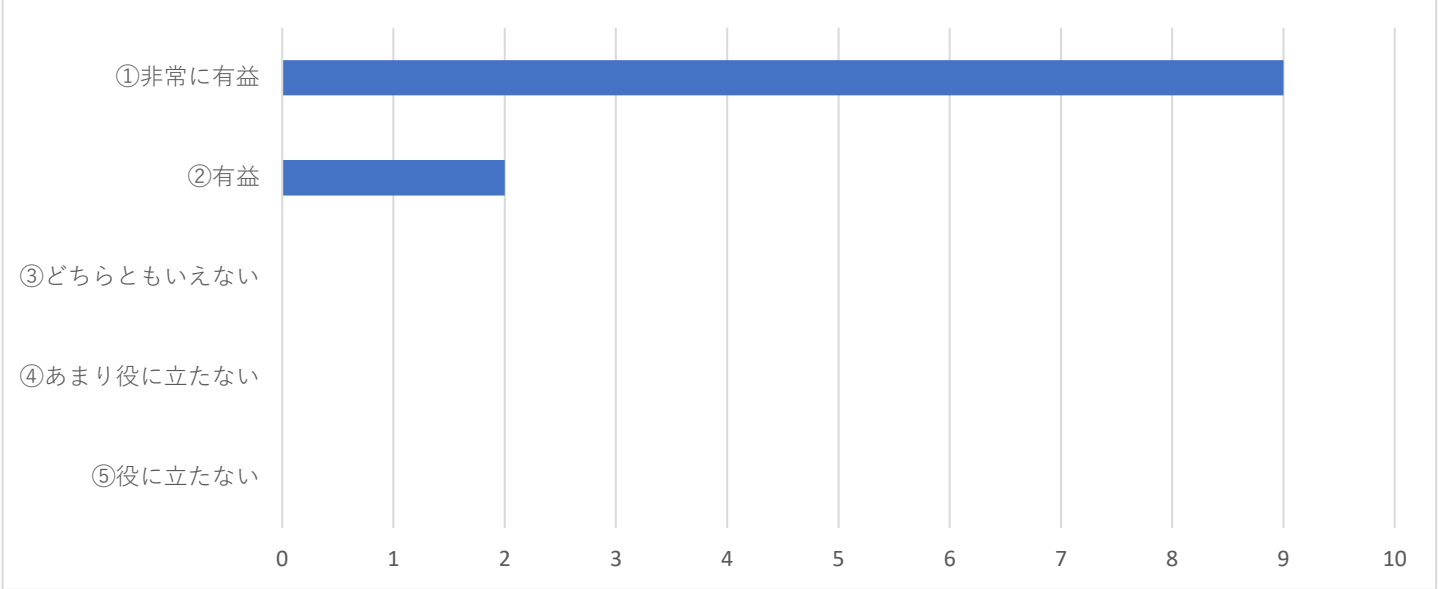
1.講演はいかがでしたか。



2.設問1の回答について、よろしければ、その理由を具体的にお書きください。

- ・被災地の状況が良くわかりました。
- ・今の被災地の状況が詳しく知れたから
- ・田中先生が精力的に活動されている状況が窺えました。まだまだボラが足りていない状況、我々も頑張ります。
- ・講師の方の現在までの取り組みを知ることができたから。
- ・被災地、被災者の実情や取り組み、今後の懸念についてお話を聞くことができた。特に一部損壊とされた家に住む人々についてのお話がはっとさせられた。

3.被災地の現状を知るため又は復興のために役立つものでしたか。



チャットからの質問と回答

Q. 田中先生や学生さんの支援はいろいろな分野・手法で幅広くやっていらっしゃるようです。被災者の方がいま何を求めているのかということ、どのように工夫して把握されるのですか？

A. 情報の収集と整理はできるだけ丁寧にするようにしています。住民のニーズについては埋もれているものも多数ありますので、現地を訪れ直接伺うように心がけています。顔を合わせることも基本かもしれません。

Q. 「地域コミュニティの再生」の例は、住民の方々とどういった繋がりを実現されたのでしょうか？震災以前からお付き合いがあられたのでしょうか？

A. 2007年の能登半島地震からのつながりがベースになっています。

Q. 域外避難（二次避難・みなし仮設）されている方々への支援はどのような入口でアプローチできますでしょうか。これらの方々がそれぞれ孤立されているのか何らかのコミュニティがあるのか、そのあたり、ご存知のことがあればお話しください。

A. 個人情報保護の点からもどこにだれが住んでいるのかをキャッチするのは容易ではありません。みなしの場合は被災住民同士のコミュニティが形成されることもまれだと思っています。行政の職員や支援員が直接の担当になるでしょうが、能登半島地震の場合、それだけのマンパワーで支援ができるかどうか。手厚い支援体制の構築が求められます。

Q. 仮設住宅の皆様への支援は、どのようにすれば良いでしょうか。
学生たちがお話を聞きに行くことは、ご迷惑でしょうか。

A. 一定程度の信頼関係ができた後であれば、いくらでも話を聴かせてくれると思います。

Q. 集会場でのコミュニティカフェのような取組の応援もあるでしょうか。

A. あると思います。支援のチャンネルは複数あったほうがよいと考えています。

Q. やはり現地に行って、考えることが必須であると感じました。☑に相談しながら、現地を訪問すれば良いでしょうか。

研究者同士、意欲ある学生を含めて、情報共有を進めて行く必要があると感じています。田中先生のお考えをお聞かせください。

A. 地元で信頼を得ているキーマン経由がよいと思います。ある程度関係ができあがれば、直接つながっていけると思いますが。情報を共有する機会というのはあったほうがよいかもしれません。「調査公害」のような研究者がやってしまいがちなことを減らす意味からも。

Q. ボランティアの依頼主さんからの差し入れなどはどの範囲まで受け取るべきでしょうか？

A. 現金や貴重品などはNGですが、食べ物や飲み物については、先方のお気持ちを考えれば、受け取ってよい範囲だと思います。ただ毎回もらうことを常態化させてしまうことには配慮が必要だと思います。